

図書館の徹底活用術⑮

図書館サービスと学びの共同体

佐藤学『学校の挑戦 学びの共同体を創る』になぞらえて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の方策を実践活動や経験を通じた学びに焦点を当てつつ今回は、デューイ (John Dewey) の著書『民主主義と教育 (Democracy in Education)』に関して言及しました。

この著作で Dewey は民主主義に於ける教育活動の特徴を、「共有された関心の範囲の拡大や、いっそう多様な個人の可能性 (capacities) の多様性が解放されること」とし、また、「様々な関心が相互に強まり作用」することに焦点を当てながら、その中に「成長の可能性」の特徴として「可塑性(plasticity)」に着眼しています。「可塑性」とは「経験から学ぶ力」であり、人間の成長、発達を考える上で重要なものとして位置付けています。

今回は、上記のことを踏まえ、学びの共同体という観点から図書館サービスの在り方に関して言及したいと思います。佐藤学はその著書『学校の挑戦 学びの共同体を創る』(小学館、2006年)で「学びの共同体」という概念とその実践を提唱しています。ここで強調されているのが、「公共性」「民主主義」「卓越性」という3つの側面です。ここでの「公共性」とは他者(即ち共同体の他の構成メンバーとその相互関係性)に対しての寛容と多様性の尊重であり、「民主主義」とは共同体の構成メンバーの一人ひとりが主人公としてその主体性が尊重されることであり、これは Dewey のいう「多様な人々が協同する生き方 (a way of associated living)」とその理念を底通させています。そして「卓越性」とは、他の構成メンバー間で発生する何らかの比較に於いて価値付けや序列をすることではなく、構成メンバーをそれぞれの主体的な主人公と捉え、それぞれの卓越した側面、換言すると、得意とする、関心を寄せるものを探求することを示し

ています。

このような理念を根底に持ちながら、それぞれの学習ニーズに基づいて協同的に学びが生成し且つその学びを支援するような活動体制を「学びの共同体」として位置付けていると考えることができます。学校教育の分野、特に子どもの学びをどのように考えるのかという領域に於いては、この「学び共同体」という理念は学習者(被教育者)への支援の眼差しが強調される傾向にあります。しかし、「共同体」という以上、その共同性を構成するもう一方の学習を支援する教育者の活動内容への眼差しと対になってはじめて協同的な学びが実現するということとなります。

このことを図書館サービスに当て嵌めて考えると、図書館の利用者の学びをどのように支援するのかというアジェンダ、即ち、それぞれの利用者を学びの場での主人公であると位置付け、その学習ニーズに基づいた多様で、且つ、他者との比較に基づかない卓越性が尊重されるような図書館サービス展開の在り方、支援の在り方という側面と、同時に、そのような学びの権利を保障し、より高次レベルの学習へと接続可能な学習機会の提案とそこへ動機付けるような、利用者・学習者の内面世界への働きかけの2つの側面をもって「共同体」としての共同性が具現化することになります。

その際に、重要になるのが図書館サービス展開の中に入り込んだ専門性・力量形成であり、簡単にいうと、学びの主人公である利用者が、「共同体」の構成メンバーとして安心して頼って貰えるような図書館サービスの在り方であり、これを支えるのがそれぞれの図書館員の専門性であり、これは日々の活動実践を支えるものとして利用者に安心感と信頼感、そして心強さなどとして現れているということができます。

えだもと ますひろ(准教授・図書館学・教育学)